

ダニエル・パリッシュ・キダーにとって、ブラジル社会を理解するうえで看過できない要点の一つは黒人奴隷制であった。奴隷制は米国と無関係な制度ではなく、アンテベラム期にはアメリカ南部に広く浸透し、当地の政治・経済システムの重要な一部をなしていた。米国の奴隷制の実態については、周知の通り、アレクシス・ド・トクヴィルの代表作 *De la démocratie en Amérique* (1835-1840) が世界的に知られており、そこではトクヴィルが奴隷制の惨状をあからさまに喝破している。こうした祖国の状況を背景に育ったキダーの目に、ブラジルの奴隷制はどのように映ったのだろうか。

#### ヴァロンゴ市場と奴隷貿易

すでに本誌 2024 年 12 月号で示した通り、ブラジルの黒人奴隷制は他国と比べても規模が突出しており、16 世紀前半から 19 世紀後半にかけて 500 万人以上の奴隷が輸入された。アメリカ大陸で最も多く奴隷を輸入した国である。なお、日本ではハリウッド映画の影響もあり、黒人奴隷制といえば米国の事例を想起することが多い。しかし、実際には米国に強制連行された奴隷は約 40 万人にとどまり、ブラジルに連行された数の 1 割にも満たない。

ただし、数の多寡がその悲惨さを左右するわけではない。奴隷制が廃止されるまで、奴隷は各国の主権のもとに置かれ、人間というよりもむしろ商品 (commodity) として南北アメリカに離散させられた。彼らは暴力による物理的抹殺や同化による文化的消滅を通じ、固有の伝統文化や歴史、さらには自己のアイデンティティをも剥奪された人々であった<sup>(1)</sup>。

こうした奴隷制に対して、キダーは相反する見解を示している。まず、否定的な記述として、1839 年当時、奴隷が多く居住していた首都リオデジャネイロの状況について次のように記している。

現在の市街地の相当部分を占めていた湿地は排水され、堤防が築かれた。街路は舗装され、街灯も整備された。それまで市街地の通りで売りに出され、嫌悪と恐怖を呼び起こす光景となっていたアフリカ人奴隷の積荷は、住民を疫病の危険にさらすこともあり、ヴァロンゴへ移されることとなった。同地は、これら不幸な人々を取引するための公的市場として指定されたのである<sup>(2)</sup>。

ここでいう「ヴァロンゴ (Valongo)」とは、現在の「ヴァロンゴ埠頭 (Cais do Valongo)」を指し、数多くのアフリカ人奴隷が到着した奴隷貿易港の跡地である。ヴァロンゴに対するキダーの記述には、「嫌悪」や「恐怖」、「不幸な人々」といった表現に見られるように、奴隷貿易の残虐性に対する批判的視線が明確に表れている。とりわけ「疫病」への言及は、貿易港の劣悪な衛生環境を想起させるものである。実際、ヴァロンゴの衛生状態は極めて劣悪で、天然痘や赤痢、黄熱病に罹患する奴隷も少なくなかった。命を落とした者は港周辺に埋葬され、その地は現在「プレトス・ノヴォス奴隷墓地 (Cemitério dos Pretos Novos)」として知られる。今日でも、同地では遺骨の収集・保存作業が続けられている。

#### 奴隷の社会的役割

こうしたマージナルな扱いを受ける奴隷の状況だけでなく、現地で奴隷がさまざまな役割を担ってきた事実についても、キダーは綿密に記録している。そこからは、彼らがいかにブラジルの社会・経済と不可分に結びついていたかが見て取れる。キダーは次のよ

うに記している。

生活必需品であれ嗜好品であれ、望まれるものはほとんど何でも供給されているこの豊富さを前にすれば、誰も不満を抱くには及ばないであろう。これらの商品は市場に豊富に並んでいるだけでなく、町や郊外を行き交う奴隷や自由黒人が売り歩いている。彼らは通常、それらを籠に入れて頭上に載せて運ぶ。ほとんどあらゆる種類の商品が、同様の方法で売られている。(…) 購入を望む者は、低く抑えた口笛で彼らを呼び止めさせればよい<sup>(3)</sup>。

こうした売り物を頭上に載せて売り歩く奴隷は「都市奴隷 (urban slaves)」と呼ばれ、リオデジャネイロをはじめ、サンパウロやサルヴァドールにも多数存在した。キダーは、こうした奴隷をめぐる社会的文脈のなかで、彼らを単なる改宗対象としてではなく、地域社会の商業活動を支える重要な担い手として捉えている。一方、自然科学の領域においても、キダーは奴隷の潜在的な可能性に注目している。とりわけ、外国人の自然科学者に関わる奴隷を「自然科学者の黒人 (negroes of a naturalist)<sup>(4)</sup>」と称し、次のように記している。

多くの奴隷は幼少期から昆虫学や植物学の標本の収集・保存を行うよう訓練され、それを継続的な仕事として担うことで、膨大な標本を蓄積している。こうして蓄積された標本は、アマチュアの自然科学者にとって格好の場となっている。もし彼らがその職分に特有の情熱を備えているならば、(…) フォン・シュピックスやフォン・マルティウスと同様に、そこからなお多くの興味深い自然史資料を見出すことができるであろう<sup>(5)</sup>。

ここでいうシュピックスとマルティウスとは、それぞれヨハン・バプチスト・フォン・シュピックス (Johann Baptist von Spix) とカール・フリードリヒ・フィリップ・フォン・マルティウス (Carl Friedrich Philipp von Martius) を指している。両者は 1817 年から 1820 年にかけて自然科学調査のためにブラジルに滞在したドイツ人博物学者であり、その成果は *Reise in Brasilien* (1823-1831) として刊行された。同書は、ブラジルの自然史 (動植物) をはじめ、地理や民族誌、社会状況を総合的に記述した著作として、当時のヨーロッパ学術界で高い評価を受けている。

キダーは、こうした自然科学者を支える奴隷の存在に注目し、ブラジルにおける自然史研究においても奴隷が重要な役割を担い得ることを指摘している。しかし、彼は奴隷制の惨状や奴隷の特殊な役割に限定して観察を閉じるのではない。それらをプロテスタント布教とどのように結びつけられるかを探ろうとする。こうした、黒人奴隷を宣教の対象とする戦略や学校設立に関するキダーの奴隷制への見解は、次回で詳しく見ていくことにする。

#### [註]

- (1) 暴力や同化によって固有の伝統文化や歴史、さらには自己のアイデンティティを奪われたアメリカ大陸の黒人奴隷とその子孫は、アフリカン・ディアスポラ (African diaspora) とも呼ばれる。
- (2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 1. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 41.
- (3) Ibid., pp. 97-98.
- (4) Ibid., p. 129.
- (5) Ibid., pp. 129-130.